

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2014年 秋号 10月8日発行 通巻54号

発行人：竹内 章（府中市分梅町）

TEL 042-364-3428

第4回

「西府わき水まつり」講演会・写真展で大盛況

講演会「水の都 府中の今と昔」6月29日
水の豊かさを再発見！

写真展 魚観察 野点など 7月18～19日
野点 バッタ作りが大人気！



会場の西府文化センター講堂で講演する神谷博氏

ハケの緑、湧水、用水の景観地域をアピールする“わき水まつり”を実施して今年で4年目ですが、東京の名湧水57選でもある西府町湧水は枯渇が心配されています。セブン-イレブン記念財団の助成を受け、パート1として講演会を企画しました。講師は「水みち研究会」代表の神谷博氏(写真上)です。

4月7日の現地下見では、府中は水が豊かだから国府が置かれたと伺い、市民の関心事にぴったりと意気投合したものです。

演題は「水の都 府中の今と昔」。サブタイトルは「武蔵国はなぜここに立地したか？ 水の豊かさは今も府中の拠り所」としました。会場は定員70名を越えて盛り上がり、パワーポイントで、専門的な研究成果も交えて話されました。

要点は、(1)野川流域の湧水をはじめ、多摩地域の水みち調査事例の紹介。(2)武蔵国府は多摩川の中流域で、更に支流が流れ込む所に位置し、良い飲み水が豊富に得られるという立地要件に合致する。(3)環境生態学の立場から、湧水・用水は府中の重要財産で、ハケの植生管理を更に手厚くする必要があります。今年は水循環基本法・雨水利用推進法が成立した記念すべき年でもであると締めくくられました。

参加者からは「水都という言葉にびっくり、水が第一の資源だと認識」。「新たな広がりのある視点について聴講できた、続きを聴きたい」。「国府と湧水の関係は興味深く、水に対する思いの深さ、府中の現状に注文つけてくれてよかった」。

このほか「時間が短かすぎ、地形、水域、歴史景観等総合的で理解が難しかった」などのアンケートも寄せられました。

パート2では、写真展や野点は市川緑道の「あずまや」が会場です。昨年は水涸れで、さびしいまつりでしたが行政に働きかけた結果、「断水」は解消され、今年はまつりにふさわしく水辺を眺めながら実施できました。

助成テーマ“保全と学び場づくり”に従って、今年は魚観察に、野点や野草遊びを加えました。抹茶をいただきながら、しばし対話する雰囲気が出て、準備した70人分が午後早々に店じまいです。



赤もつせんに腰かけて野点を体験する二人の中学生

ハケに自生するシュロの葉で作る野草遊びは、今にも飛び出しそうなバッタづくりが大人気。初参加のあるスタッフは、引っぱりなしに挑戦する市民の姿にびっくり、来年も野草遊びを手伝いたいとの感想も…。

生きもの観察1日目は、農工大スタッフが、用水路で捕える魚類観察です。近くの第五小学校の児童らが立ち寄り、大いに賑わいました。2日目は日新町の田んぼで、小水路に入り、タモで魚とりをしました。

子どもたちは、捕った魚やザリガニの水槽の周りを離れず、手で触ったり、水の入れ替えなど飽きずに眺めていました。この風景こそが理屈ではなく、体験学習だと実感。

写真展も含めて2日間、立ち寄ってくれた市民は330人を数え、大成功です。市後援による簡易掲示板、ポスター掲示や近隣自治会へのチラシ配布と、地道なPRも効きました。(進藤礼治郎)

活動予定 ①秋の清掃/10月18日10時(雨天19日)東屋②歴史・自然遺産巡り(一里塚、湧水、ハケ、熊野古墳)/11月24日10時(株)NEC正門前③樹木名札つけ/12月7日9時30分東屋④巣箱づくり/1月10日10時⑤野鳥観察会/2月21日東屋(時間未定)

第9回 田んぼの学校

天候に恵まれた 「草取り・生き物さがし」

府中市からの受託事業の2014年度 2回目の「田んぼの学校」は、前日の雨もあがり、以下の要領で行ないました。

日時 7月6日(日) 9:10～11:30

天候 晴(微風)

参加者 84人(生徒26人 保護者28人 スタッフ30人)

※スタッフには東京農工大5人、都立府中東高校生物部教師1人と生徒7人を含む(写真右)。

まず、ピョピョさん体操で体と心をウォームアップした後、田んぼに入り、田の草取りを主に田車(※1)6台を使って行ないました(写真下)。

お母さんと一緒に押しています



※1 田車(別名 田打車)明治初期に日本で発明された除草用器械。鉄の歯を付けた円筒を回転させて除草する。苗の正条植への普及とともに広まったとされる。人がしゃがんでの草取りをせずにすむもので、概ね人が押して操作する。一部、牛や馬など家畜にひかせるタイプも残っている。

次に、田んぼの中の生き物さがし、アゼの生き物さがしを行ないました。5月25日に田植えをした稲の苗は30cmほどにまで育っていました。



田んぼでのんびり、カルガモのツガイだろうか…

府中東高校 生物部の先生(左側)と生徒



しかし、植えた場所の30～40%はなくなっているか、クログワイ(※2)などの雑草にとってかわられていました。

※2 クログワイ:カヤツリグサ科の草。畳表の材料のイグサに似ているが別種(イグサはイグサ科)。カヤツリグサ科の有名なものとして古代エジプトの紙として使われたパピルスがある。

農薬を一切使わない農法であり、農家のように毎日田んぼを見まわったり、手入れをしている訳ではないので、原因や日々の変化の状況はわからない状態です。

10時過ぎには田の草取りはひとまず終え、田んぼの中のカエルなど水生生き物さがしを子どもたちは終え、次にアゼの生き物さがしを行ないました。

トウキョウダルマガエル



カエルはトウキョウダルマガエルといった東京都の絶滅危惧種もありました。ザリガニやチョウチョ、バッタなど女の子も男の子も、目を輝かせてさがし、捕まえていました。

当日の子どもや保護者との草取りは「生き物さがし」の予定があり、1時間程度で終えましたが、雑草の量が多く終わらなかったため、9日9日午前中実行委員の有志4人で草取りを継続しました。
(小西信生)

9月だ！ 秋だ！ 稲刈りだ！ あっという間の4か月

たんぼの学校 稲刈り・ハサかけ

実施 9月28日(日) 午前8時30分～11時30分
 場所 東京農工大 府中本町実験農場
 天気 快晴
 参加者 こども23名、保護者20名
 ボランティア 東京農工大学より4名、府中東高校より4名
 (みんさん、いつも、ありがとうございます)

● ラッキー！ 最高の秋晴れだ

台風17号が接近中の青空だ。受付開始、保護者と一緒にこどもたちがやってきた。虫かごや昆虫採集網をもっている子もいる。目的は泥遊びや昆虫か。

「ぼくの身長は4センチ伸びたよ」小4年の男の子。「お米は約4か月できたね(5月田植え9月稲刈り収穫)。「ライオンさんはお米食べないよ。鳥は食べるよ。大きくなったら動物園の飼育係になるの」と小2の女の子。

「ぼくは宇宙飛行士になりたい」小3の男の子。「今度、宇宙ステーションに行く油井さんは農業を手伝ったことが役に立ったようだ」と返事をしたら逃げられた。意味が通じなかった。あちこちで、子供と大人、参加者どうしの会話がはずむ。



刈り取った稲をお母さんと一緒にひもで結ぶ

● 稲刈り開始！ ちょっと危ないことがちょうどいい

稲刈りハサかけの諸注意。その後、ピョピョ体操で体をほぐし、“鎌”をもって田んぼに入る。稲刈り開始。

怪我が心配で大人はこどものそばを離れられない。へっぴり腰で緊張しながらも3、4束を刈り取ると「だいじょうぶ、こうやるんでしょ」「じぶんでできるよ」「あぶないね、ちゅういするね」あっという間に慣れた。それでも心配だから大人が注意深く見守っている。

こどもたちは軍手をはめた小さい手で稲をつかみ器用に刈っていく。女の子も男の子「できた！」自信と満足に満ちたい顔になる。危険だから触らせないより、危険を教えて使わせることが成長に役立つ。

● ハサかけで想像の翼が広がる

「秘密基地だ！」「おかし持って入る」「ゲームはあるの」。

背伸びしながら、親に支えられながら、ちびっ子たちが刈り取った稲の束をポールに掛けていく。端からぎっしりつめていくと、それは屋根みたいだ。「おうちみたい」「かべはどうする」こどもは想像の世界で遊んでいる。たのしくドンドン作業できた。予定より約30分早く作業終了。

● 記念写真は虫たちと



青空のもと、稲刈り後の田んぼに全員集合！

作業終了後、ハサかけの前で集合写真。見えるだろうか？ いつの間にか採集した、バッタ、カエル、モンキチョウ、アゲハ、カマキリ、サリガニ・・・こどもたちの手の中にある。紫色のちいさな花を持つ子もいる。未来の科学者たちは昆虫や植物の研究を忘れていない。

● ミレーの落穂拾い

全員が、稲刈りとハサかけを体験できた。締めくくりには主催者がミレーの絵に触れ、「落穂ひろいをした人は？」こどもたちに質問した。何人かが手をあげた。

「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。…これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない」(旧約聖書「レビ記」)。たんぼの学校で“分かち合うこと”を学べたら、それは最高だと思う。(左下の絵はミレーの落穂拾い)



アジアの国々は米でつながっている。人口密度の高いアジア諸国が米を主食にしている。米で世界の人口の半分が友達になれる。

世界に誇る食文化、美しい日本の自然環境の保全是“たんぼ”の存続で初めて維持可能となる。虫取り、泥んこ遊びが目的でいい。

「田んぼの学校」で稲作文化の一端を知らず知らずに体験することは有意義である。

最後に、今年の生徒は32名である。しかし、今回、行事などと重なり欠席した9名は、残念なことこの素晴らしい体験をのがした。10月は脱穀、11月には収穫祭を行う。今度は32名全員で楽しみたい！ (あさい ひろずみ)

府中農業の現状と援農ボランティアの役割

府中農業の現状

1.農地

府中市には現在、農地が約152ha(総面積の約5.2%)ある。しかし、10年間で23haが減少している。

生産緑地は17.4ha減少し、宅地化農地は4.8haとなっているが、減少は鈍化傾向(年間3~4ha)にある。

2.農家と農業従事者

ここ10年で475戸が468戸、1,091人が1,020人と減少。専業11戸が10戸、第1種兼業28戸が20戸に、第2種兼業436戸が438戸に、第1種兼業が8戸も減っている。

(1)農業従事者の高齢化は、10年前は62.0歳が平成25年度では65歳。年々高齢化が進んでいるが、若年後継者の農業復帰も若干うかがえる。後継者がいない農家は10年前の27.1%が平成25年度には30.5%と増えている。

(2)労働者不足の対応として、家族労働の範囲で、機械化などの省力化を図るのが大半を占め、パートを雇う、人を雇うとした農家は10%程度となっている。援農ボランティアに手伝ってもらおうと回答したのは13.4%だった。

平成10年に援農ボランティア制度が創設され、平成16年で、17戸の農家で88人、平成25年度で31戸の農家で128人の市民援農ボランティア(3団体一法政大 農工大 当会)が活躍している。

3.農業経営

(1)消費者ニーズに合った販売方法

近年、都市化が進み、消費者が近くにいる、生産の利益率が高いなどの理由のため、市場出荷から直売(庭先販売、共同直売所、観光農園、畝売り、体験農園、スーパーの地場産コーナー)方式に転換している。

(2)農業収入の低迷

相変わらず継続し、第2種兼業農家(農業収入が農外収入より少ない)が農家の93.6%を占める。

(3)作物別の現状

①稲作一昭和61年から比べると戸数、面積、生産量が半減しているが、10年前と比較すると面積、生産量が増加している。古代米(黒米)が加工品と合わせ、人気を得たせいである。

②野菜一生産金額、作付面積、従事農家とも府中農業の中心で、コマツナ、ダイコン、キャベツ、ハクサイ、ジャガイモ、ワケギなどハウス栽培が盛んで、農事研究会連合会、出荷組合などをつくり、経営努力をしている。

③果実一ナシ、ブドウ、ブルーベリーなどは、品種改良、直売、観光農業などで維持・拡大を図っている。

4.市民とのふれあい農業

行政も労働者不足と農業経営改善の両面から、以下のことを市民との協働で行っている。援農ボランティア、畝売り、市民農園、体験農園、観光農園、市民農業大学、親子ふれあい農園、学童農園、田んぼの学校、農とウオーキングなど。以上の府中農業の現状を踏まえ、次に援農ボランティアの役割を考えてみたい。

援農ボランティア(南町の小林 茂農園にて) H26.9.14撮影



援農ボランティアの役割

府中農業は、非農業者の市民の参画で成り立っているといても過言ではない。そのなかでも、無償の農作業手助けは貢献度が大きいと思える。このほかにも、次の4点を示す。

- (1)農園主の農作業を助ける。具体的には、草取り・片付け・植えつけなどの作業。ボランティアは31農家で、120人ほどが活動している。農家の大半は家族労働で行うという考えだが、地域、近所のボランティアと一体となるのが望ましい。
- (2)農地保全につながる。我々市民の会が援農活動している最大の理由。農家と市民とのコミュニケーションが促進され、相互理解につながる。
- (3)健康保持、農園への往来(自転車通勤など)、軽い農作業、仲間や農園主とのコミュニケーションは心身共に健康によい。
- (4)栽培技術を学び、取れたての農作物をお礼に頂く。また、エコ活動にも貢献している。(竹田 勇)

私は、この年まで(79歳)健康で、援農活動に励み、府中農業・農地保全に貢献していることを、大学や会社の後輩たちに自慢しています。

援農ボランティアに関心をお持ちの方(男女、年齢を問いません)は、竹田 勇(042-364-3623)までお問い合わせください。

第11回 身近な水環境の 全国一斉調査

主催／全国水環境マップ実行委員会

多摩川・府中市管内6ヶ所のCOD測定

10年目の昨年は全国で863団体、5397地点で実施された。その内10年連続参加団体は全国94団体で、当会もそれに含まれている。

今年の第11回身近な水環境の全国一斉調査は6月8日であったが、数日前からの雨で多摩川の水量が多く、また当日も雨の為安全を考え6月14日に変更し実施した。例年どおり6人のメンバーを上流組と下流組に分け調査を実施した。

今年6月は雨が多く、6月14日も多摩川の水量は多かった。その関係か全体的にCOD値(化学的酸素要求量※)は低かった。調査結果は下記のグラフを参照願います。

※COD値とは代表的な水質の指標の一つで、酸素消費量とも呼ばれる。数値が低いほど汚染度が低い。単位はppm

特記事項

1. 毎年河川工事がされており今年も調査地点、大丸堰の上流が工事中で川の流れが稲城側になりサンプリングは川の中央になった。
2. 過去5年間の調査で、COD値2以下と8以上の値がなかったのは始めてである。
3. 今回のCOD値は、平成20年度と類似しており全体的に低かった。
4. 北多摩一号水再生センター(下水処理場)と北多摩二号水再生センター(下水処理場)共に多摩川との合流地点でのCOD値は高かった。

今年も多摩川に540万尾のアユが遡上！！

昭和58年以降アユの遡上を東京都が毎年調査されている。多摩川河口より11kmの地点(丸子橋)で定置網方法で実施している。

平成20年前後は140万尾前後のアユの遡上が、平成23

年以降急増して平成24年は1190万尾、25年は640万尾、26年は540万尾である。

東京都がアユの遡上が多くなったのは河川環境の改善といっていますが、多摩川の水質との関係はどの様なのだろうか。府中市管内での多摩川の水質はよくなっているとは思えない。

東電鉄塔南での調査



多摩川の水質は下水処理場の放流水に左右される！！

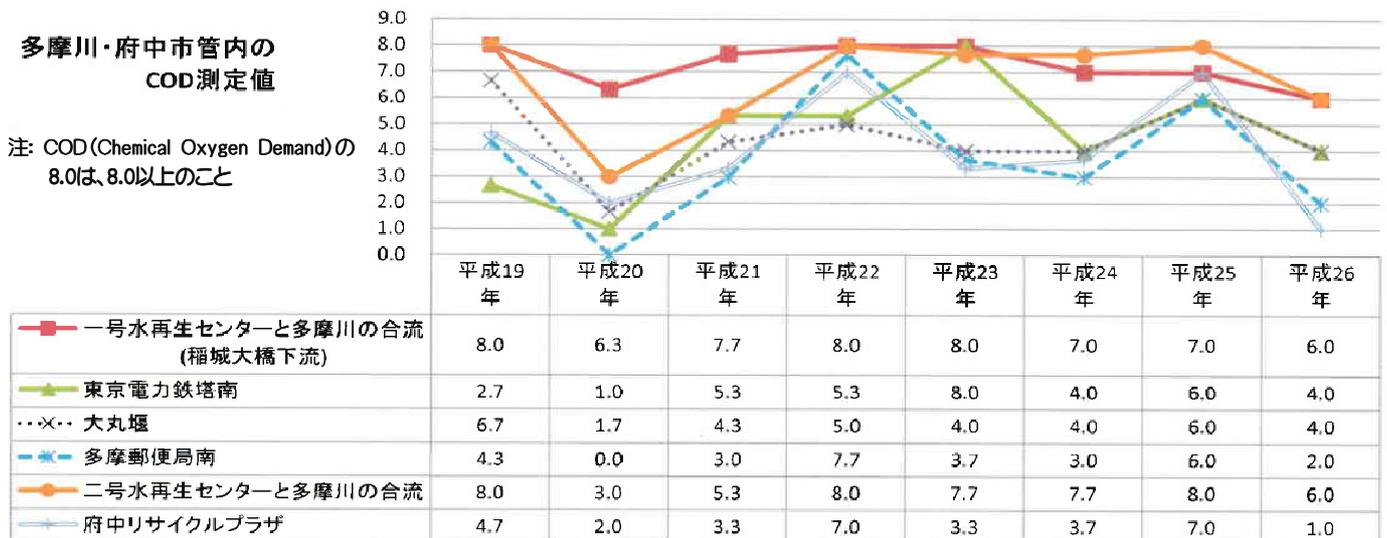
「全国水環境マップ実行委員会(委員長は当会の顧問でもある小倉紀雄氏)」は、今年度より関係が深い下水道関係者との連携を進めるとのこと。多摩川地域400万人の下水処理は、6ヶ所の下水処理場で処理され多摩川に放流されている。この内北多摩一号水再生センターが府中市に、北多摩二号水再生センターが国立市にある。

多摩川の水の70%は下水処理場からの放流水といわれている。多摩川は笠取山に源を発し溪流を下りダムを渡り東京湾に注ぐ138kmの川である。多摩川流域の人々は大きな恵みを受けている。

水道水に使用されその後下水処理場で処理されふたたび多摩川に戻る。河川敷は自然が多く残されており市民の憩いの場になっている。多摩川の水質管理を含め全体の自然環境を大事にしていかなければと思う。

(五十嵐 四郎)

身近な水環境の全国一斉調査



原発事故
から3年半

南相馬・住民たちが進める 農地再生・地域再生への取り組み

当会の浅田多津子会員が、4月に福島原子力発電所の事故から3年経過した福島・南相馬市を訪れました。

また9月には、福島で農業を営む杉内清繁氏(南相馬農地再生協議会代表/えこえね南相馬研究機構理事)を招いて府中で学習会を開催しました。

これらの主催は、市議でもある浅田会員の所属会派によるものです。(編集部)

津波と放射能被害は広範囲に続く

4月6、7日に生活者ネットワークのメンバー10名で南相馬市に行った。「北関東大震災障がい者救援本部」にかかわってこたの方の案内で、JR仙台駅からマイクロバスで最初に名取市に向かった。

海岸から1km、標高1.7mの仙台空港周辺、田んぼ面積の半分が浸水したゆりあげ地区、さらに南相馬市へと進む。

原発からちょうど30Kmのところにある小学校では、海岸からは2Kmも離れているが、校舎の1階部分・校庭・体育館が津波被害に遭いそのつめ跡が残されていた。

児童76人と先生11人は全員無事高台にのげることができたとのことだが、その後児童数は減り、隣の小学校と統合することが決まり現在は廃校となっている。

コンパスで描いた原発から30Km圏内では、生活支援費として月に10万円が支給されるが、圏外は支給されず地域住民の軋轢を生み出すことにつながってしまったと聞く。



この地で暮らし続けたい

その夜は、3つの「農家民宿」に分かれて宿泊。私は、壊れた防波堤からすぐ近くの民家に泊まる。小高い山の内陸側で津波から逃れ、壊れずに済んだ民家は地形を生かした高台に建っていた。

民宿の方々は私たちを明るく迎えてくれた。日中は夫婦ともに車で仕事に行き夕方は民宿を営むなど、少しずつ人々の暮らしは戻りつつあるようだが、これまでの道のりは長かったと想像する。周辺の田んぼは塩害を受け、今後大規模な太陽光パネルを設置する方向で話が進んでいるという。

自分たちの地域は自分たちの手で！

「半農半電」再生可能エネルギーの普及を進める活動

翌日は、原発から20Km付近の南相馬市小高町で、「原子力に依存しないまち」をつくるために再生可能エネルギー導入による地域づくりを進めている「えこえね南相馬研究機構」の活動について話を聞く。



農地再生から地域再生へ「半農半電」

大資本会社に任せるとこれまでと同じようなことを繰り返してしまうと、自分たちの地域の農業再生と地域活性化を目指し、農地(第一種可)と太陽光発電の共存(ソーラーシェアリング)として、作物を育てながら約3mの位置に太陽光パネルの設置をする「半農半電」のしくみを進めている。

「菜の花」で農地再生、そして地域再生へ

さらに生活者ネットワークでは、「菜の花」の栽培を通して土壌浄化を進め、農業再生と地域活性化を目指す「南相馬農地再生協議会」代表の杉内清繁さんを府中にお呼びして学習会(9月6日)を開催した。

有機稲作の研究活動をされてきた杉内さんらは、警戒区域での米の作付、福島県産米の全量検査体制の構築、稲作以外の作付栽培の実施など試行錯誤で進めている。



「菜の花プロジェクト」では、「なたね油」は放射能の影響を受けないことがわかり化学薬品を使わずに精製し販売が始まっている。

チェルノブイリにも行かれ「地域再生は今を生きている自分たちの役割だと思っている」と杉内さん。来年の春に向けての活動がすでに始まっており、「南相馬で種まき体験」をこの9月27日(土)に現地で行う計画だ。

原発の安全神話を信じきってきたが、脱原発を進める活動や農地再生に取り組まれる杉内さんの行動力に一筋の希望が見えた。

この「なたね油」は、10月19日の府中公園での平和まつりで販売する予定だ。(浅田多津子)

福島の子どもたちと2泊3日の野外体験

「福島の子どもたちを招く 府中市民の会」の泉 千鶴子さんに寄稿していただきました。

福島の子どもたちを思いっきり遊ばせよう！

2011年、福島県内の子どもたちは東京電力福島第一原発事故による放射能の影響で、夏休みも屋外で遊ぶことができず、窓を開けることもままならない中で過ごしていると聞き、福島に住む子どもたちを府中市に招いて、外でおもいきり遊んでもらおうと保養事業(20名2泊3日)を始めました。

2011年当時は、福島では運動会もプールも開かれることはなく、子どもたちは夏でも長袖を来てマスクをつけて学校に行き、学校では休み時間はトランプなどをして教室で過ごしていたということですが、今は徐々に外遊びも増えてきていると聞いています。

協同村の脇に流れる秋川で水遊び



「協同村ひだまりファーム」に30人が参加

4回目となる今年は、8月1日～3日、あきる野市にある生活クラブ生協の「協同村ひだまりファーム」での保養に子どもたち30人が参加しました。

協同村は、秋川のほとりにあり、山や川や畑や池など豊かな自然に囲まれています。昨年に続いて、生活クラブ東京の協力で宿泊施設を無料提供していただきました。

これまでは、府中市の生涯学習センターで宿泊していましたが、今年は確保することができず、場所を移しての活動でした。

多くの子どもたちが一番楽しかったこととして挙げている川遊びでは、水の中でおもいきり遊ぶ子どもたちの笑顔が輝いてみえました。広い原っぱで駆け回ったり、池や畑を散策したり、普段は家で遊ぶことが多いという子どもたちも、リフレッシュしていたように思います。

ボランティアの輪が広がる

この活動では、被災地には行くことはできないけれども、子どもたちを応援したいとカンパやボランティアで多くの市民のみなさんが関わってくださっています。

保育士グループのメンバーは、毎年、子どもたちと一緒に遊ぶために参加しています。食事やバーベキューなどの野外活動は市民ボランティアが担います。

今年はトランペットとカホンの音楽隊のお二人や、ホームページをみて小学校の先生も参加してくれました。協同村の川遊びや多摩動物公園の引率には若い市民ボランティアも参加して、ボランティアの輪が広がっています。

福島に住むご家族も応援していると実感

笑顔で元気一杯の子どもたちですが、1日目は雷が鳴り、山に響く雷の音と停電で泣き出す子どもがいました。自然の凄さが、地震の恐怖を呼び起こしたのでしょうか。また、おやつを食べながら、この3年5か月の間に10回引っ越したことをさりげなく話す子もいました。子どもたちの被災はまだまだ続いているのだと感じました。

子どもたちがおもいきり外遊びができるようにとはじめた保養事業ですが、お母さんたちからは「福島に住むことが子どもたちにとって本当にいいことかどうか悩み葛藤しています」、「原発事故によって、いいことなんかひとつもありません。失ったものばかりでしたが、それによって、心を寄せてくださる方々の温かい気持ちを知ることができました」といったお手紙をいただき、子どもたちを応援することが、福島に住むご家族も応援していくことができると実感してこの活動を続けています。

協同村の池で生き物を探索



皆さまのご協力を

資金面では、助成金を申請していますが、獲得は難しく、カンパに支えていただいているのが現状です。今後の活動のためにも皆さまのご協力をお願いいたします。

会活動の経験生かし、故郷(鳥取)の街おこしを提案

私の故郷は、鳥取県の西部に位置する「境港市」である。2年半前に、「観光客の滞在時間が極めて短い」との悲痛とも思える声を故郷から聞きつけ、在京の高校同期生(9名)に働きかけ、提案することで合意を得た。これが『美しい街と健康山陰ーを目指す』である。実はこの提案のきっかけがある。市民の会に入会する前の「環境塾」で「水と緑」のテーマが与えられ、街おこしを提案したことや、市民の会で「援農」や農地農業保存研究会で「農産物直売所の活性化」をまとめたことなどが大きく影響した。(渡部敏郎)

提案に当たっての事前調査では

- 観光客の入込数⇒境港市のげ！げ！げ！の鬼太郎のブロンズ像が153体ある「水木ロード」は、2010年に過去最高の372万人の観光客を集めた。下表参照(開設'93)
- 観光客の滞在時間⇒これだけの観光客で滞在時間は、特に団体客は僅かに1時間。
- 商店街の売上低迷
- 街の賑わい⇒賑わいは「水木しげるロード」のある街の一部に過ぎない。市に寄せられた「行政の施策への市民のご意見」には、不満が多く寄せられた。
- 水辺と人口密度⇒来境の観光客の居住地は、近畿・東海・東京、即ち人口密度の高い地域の人が多い(観光協会調査)。従って、人口密度の大きさは、水辺への関心度に比例するとの調査結果も。(「水辺の街づくり」技報堂)

以上のような実態から次の事を考えた

1. 故郷を離れているからこそ分かることが多々ある。
2. 観光客の影響ができるだけ全市に及ぶものを提案したい。
3. 境港市に埋もれた観光資源となるものはないか。
 - ・市内点在する「雑木林」(大部分は40～50年前に耕作放棄地になっていた)及び緑地
 - ・「白砂青松の弓ヶ浜」(弓ヶ浜半島東側にあり、20kmに渡って弓のように美しい弧を描く海岸。日本の渚百選、日本の白砂青松100選に選定)
 - ・弓ヶ浜沿いの4.4kmに及ぶ「松林」
 - ・市内全域に渡って水が流れる灌漑用水「米川」
 - ・海浜植物のこうぼうむぎ・はまごう・浜大根・浜昼顔等が昔と変わらず咲いている。

「せせらぎ遊歩道」をテーマとして取り上げた

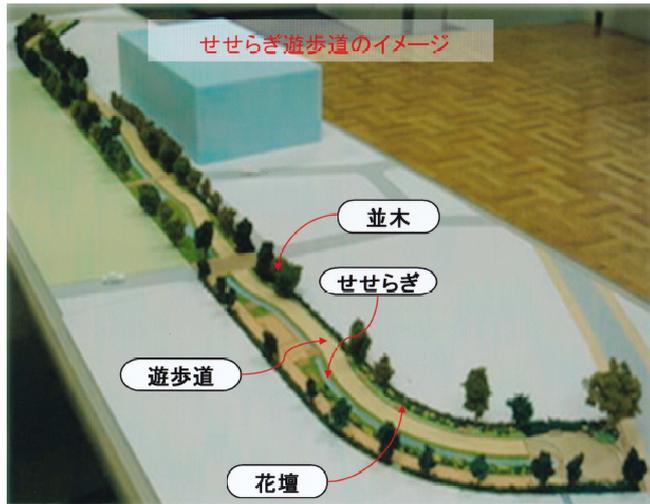
- 美しく歩いてみたいと思わせる「せせらぎ遊歩道」を市内全域につくる。
- 遊歩道は灌漑用水を改修し、市内の雑木林・緑地・松

境港市への観光客入込数(万人)

'94年	28	'10年	372
'98年	47	'11年	322
'03年	75	'12年	271
'08年	172	'13年	284

- 林と結ぶ。
 - せせらぎの兩岸に「並木」と「花と灌木」を植栽。
 - 遊歩道の周囲に⇒動物触れ合いランド・水遊び場・生物共生の池・ドッグラン・ふわふわドーム・よちよち歩き広場・農水産物直売所・オープンカフェを配する。
- 遊歩道は、家族と或は恋人や友人と話をしながら、季節の花を楽しんだり、並木の緑は心を安らげてくれる「散歩」道であり「walking」や「jogging」の道でもあり、健康に直結するものでもある。

せせらぎ遊歩道のイメージ



境港市民の健康状態と、運動による疾患の予防

県別ではあるが、疾患別死亡率全国ランキングで鳥取県の健康状態が著しく低レベルにあることが解った。⇒肝臓癌(男15位/女10位)肺癌(7/14)胃癌(11/20)大腸癌(9/9)乳癌(17)脳梗塞(15/10)歩行数(47/45)健康寿命(31/33)。

同時に上記の疾患は、運動による予防効果があり、科学的根拠があることも解った。この運動は継続されて初めて予防効果がある。持続させないと意味がない。持続の手段として筑波大学が開発したe-wellness systemに注目した。

このプログラムに従って「walking」し、結果をITに記録し、ITによって報告し科学的根拠に基づいた助言を受ける。結果は全国の企業や市民及び個人に対して著しい実績を上げている。⇒メタボ解消・体力年齢の若返り・医療費抑制と削減効果(10万円/年/人の削減の実績)等で……。

『美しい街と健康山陰ーを目指す』の企画提案

我々は、このe-wellness systemを評価し導入を推奨した。資料は、系統図によって表現をし、提案itemsは何れも具体的例で示すことに苦心し、全てに根拠となる資料を添付した。運動と各疾患との予防のメカニズムについても同様だ。

本テーマ『美しい街と健康山陰ーを目指す』としたのは時宜にかなった企画提案と自負している。

大きな注目を浴びる

6月6日(金)午後、市長以下街の有力者40数名を前に説明会を実施した。この模様は、翌日のローカル紙やケーブルTVで大きく報道された。